





# 童子教養記

本

此書とほせんとはおまづいふれどもとてこれとてつ  
 ひともまは此書のほろりとあつてつるは他書のほろりとあ  
 げそのまは懸考の子細とてつるは他書のほろりとあ  
 く親するは中一に此書にほろりとあつてつるは他書のほろりとあ  
 系教よとてつるは中一のほろりとあつてつるは他書のほろりとあ  
 とつてつるは中一のほろりとあつてつるは他書のほろりとあ  
 ぢやとは中一のほろりとあつてつるは他書のほろりとあ  
 わつてつるは中一のほろりとあつてつるは他書のほろりとあ  
 まつてつるは中一のほろりとあつてつるは他書のほろりとあ  
 一められつるは中一のほろりとあつてつるは他書のほろりとあ



〒100東京都千代田区千代田1丁目31-5  
 鷺宮学園幼稚園



かためは因果のたれと云ふすともは此書ののれりうれはこれぞ  
色うれ附るはこれらお時問答著述の即成松記なり  
たれふれいなるは又幾なりとありさうなるもまれり  
これにわづらう務勞とゆはまへりさう中二に後記の何と何げ  
ハ元亨釋書まへりこれにいく教の安徳は信濃大師の系族  
るり母ゆめさうくゆ星とて海に入るといふてさうしてあり  
生とゆにれはびく聡敏人にもさうさうさうやと唐山にのり  
衣と慈覺の室にうけくらひ松家の奥松餘蘆にさう又松  
れ海船につまらうとて胎死の海とさうくはまを津海に  
彌一 百歳小馳駿もその述作とさうと松大教と捕彌といふ  
ゆるお時問答著述心象垂目曼喜ゆゆり乃至元亨八年み  
こころりしてえをうけ海船の船架にみくられり松三に懸名  
とまやくとま喜喜とた廣顔に童は扱ありさうと海にまきとた

を海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
とりのを海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
れり其むねれ記ふさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
一とりのを海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
ねらぬおのさういれりさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
のゆはぬ年宮のま松のさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
と天竺にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
さう又文武部補海才七のゆはぬと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
衆とさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
と童といふのさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
ふふに草のさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
これにありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと  
れま松に教をさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと海にありさうと

童子



竹窓三筆  
以父母恩  
重經為  
偽解

て下知ゲチもるコウ海ウミの字ジ知チのニ行ユゆるコウ書シは  
公コウ儒ニのニ致シとク一ニてキまマとシぬシまマのカ也ニ

父母貴人前

恥病不巧也

少シ以レ文ヲ章ノのニ比ビひテはク一ニはクとシてキれ  
初ハ之ノこトはアり貴人とん父兄をれ事あり父母を知シ  
終ニ父母とシ人とつがごとあらひレ父や兄にまじらズ  
わらう人とシてスめるべし一一恥病とシわらう人とシて  
初ハ之ノ父兄自然疎遠のおに信まらずといわらう人とシ  
らう人と事とせぎひごゆげまなくとしレ恥病とシ  
はとあとめり

遇道初統也

有百半敬取

あ子尚胸向

慎不取友者

不同志不答

有信志懂回

初ハ以レあらひひごまつといてはといふといふ父や兄とシ人とシ  
大道まとあらひひごまつといて礼としてまなくといふ人とシ  
れしす事あらう人とシわらう人とシぬ事といふ人とシぬ事といふ人と  
子といふ人とシてまなくといふ人とシてまなくといふ人とシ  
うもりまなくといふ人とシてまなくといふ人とシてまなくといふ人と  
うもりまなくといふ人とシてまなくといふ人とシてまなくといふ人と  
とあらひひごまつといて其人のあらひひごまつといて其人の  
といふ人とシてまなくといふ人とシてまなくといふ人と  
へといふ人とシてまなくといふ人とシてまなくといふ人とシ



ありさきより心とまらせりさるる又何とせむおしせ何  
らぐんとほくさるるさるる

禮記曲禮篇云遭先生於道趨正立拱手先生与之言則對不與  
之言則趨而退註云先生父兄稱也拱手合掌之也又云見父  
之執不謂之進不敢進不問不敢對此孝子行也又云侍坐於  
先生問焉終則對

### 三室者大

神明致再ね

### 人間成一礼

昨志可頂戴

聖法を子に憲法にいとく篤敬三室三室を仏法僧也と有り  
仏法僧れらに室れ室れと付るる海に世のほつるる  
のれたるるとありあれたらち南に福人とするるる

三室者大  
論二十二  
云人中室  
者是仏九  
十六種道  
法中室者  
是仏法下  
切衆中室  
者是僧

死のありとありさるるのいふはさるるのいふは  
よのありと有りさるるのいふはさるるのいふは  
へにさるるに室れ室れとありさるるのいふは  
中れさるるのいふはさるるのいふは  
三室ありさるるのいふはさるるのいふは  
も有り三室に室れ室れとありさるるのいふは  
さるるのいふはさるるのいふは  
密と有りさるるのいふはさるるのいふは  
教氏ありさるるのいふはさるるのいふは  
らびれ資ありさるるのいふはさるるのいふは  
て室の三室のありさるるのいふは  
く有り三室のありさるるのいふは  
でし時とありさるるのいふは



紙氏要  
肝膏俗  
也四拜  
者盖法  
陰陽七

くあふ三祀とけしこれとるゆとありされももり此  
國治代及ぶる事を愧て人此神とけけざる偽もありし事崇行  
紙又裁り之れとた又之ねともいゆれ世にも  
餘宗にらりて之れの儀をてこれとて  
の流とこれの家のおとす事いふとことと三業  
とくやゆと相とわすり智彦編中も心か  
うり男くはととたす急ともうゆに之ねとすてこれ  
ずとともく次に神明もた再ねとつとせとたすの神明と  
は此流よりいへを流生流流れために和合の相とあり  
つとまたい神も此家ふとあり法報意の之祀と後  
とるごとくに累とこのれとともひとのありは性神  
とこのよりとて神々のあり神横神ありいゆは去に神明と  
あるはかして松元有是神とす真追の破神破心祀に

いよく有是神とすい又六天怒是冥神とすあり此地は  
三祀成れがとけありい等覚位位のとつと内徳三祀  
いよりとやわらふ日右位位のちりに体よりなまふ二月百  
の柳葉和光日磨の神明やといり自下れ宗廟とあがり  
とそゆつと天照八幡等流流神といふこれと有是神か  
りとるは神といひかあといふたこれ流流流流流流流  
れは主人の之をい一神と知りてとるはこれとるあふ人  
再おとらふあり加宿が流事流流流流流流流流流流流流流  
の文といふとほりていよく之れ再ねは地と無迹といふ  
ありといり次に人間と一祀とありこれと無迹といふ  
しんあり人万山をさす下あまといひていよくこれとみ  
わらふ又師匠とる人今と項戴とていよく之にづく  
りてはらわらふとあり流流流流流流流流流流流流流流流



色かつけとて心とまこれ時とらるる禊にのせらるるに  
 ともや、観音があられしときいふ師の法殿と念どてふ  
 りれ中れ何後後れまもごとといふも大御入御時が  
 れ上礼の倡なまはまてうりこれ又師と項戴する後あり  
**墓時則情**      **社時則下**  
 藝と及人と葬礼しうらるるにうらるるにうらるるに  
 けりりととるるにうらるるにうらるるにうらるるに  
 ざらり伏すしてすまじくはたなり又社とて社とて  
 うらりなり印典に社禮といふ事あり社にほちれりて授け  
 親のくもやそれまほりやうらるるにうらるるにうらるるに  
 撥教にみくうらりいげれまも鬼神れゆらりとます  
 ハ馬らりたりおぼしうらりてゆらるるにうらるるに

禮記檀弓下篇云子路曰吾聞之也過墓則式過社則下陳  
 師道思亭記云視廟社則思敬

**向堂之塔之前**

**不可致不淨**

**向聖教之**

**不可致是礼**

塔と云ふはまのりけれ教部うりまのりまのりまのり  
 塔と云ふ一切の塔を二十七の南とてまのりまのりまのり  
 まのりまのり宰者塔とてまのり天竺にまのりまのり宰者塔とてまのり  
 まのりまのり塔のまのり葛城の塔とてまのり八景の塔とてまのり  
 まのりまのり仏の堂とてまのり仏の塔廟とてまのり戒壇園とてまのり  
 向に塔のまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり  
 向に堂のまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり



くけりやうとらびとらほと増しとていり次の句  
ふろ衛とあるは大小使われぬがひみとらにこして依  
れりといとけりふく又聖徳太子流法的眼像と不淨  
流法の相とけりた由とていりた由とていりた由と  
乃らうに酒肉又斬と食し非姪正姪とていりてた由に  
は志とていりた由とていりた由とていりた由とていり  
唯れ正理を也とていりた由とていりた由とていりた由に  
らうにあり又明眼像といとていりた由とていりた由と  
餘り来た時にいりた由とていりた由とていりた由と  
けりといりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
當にいりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
唯れは伽藍は界内地と小使といりた由とていりた由と  
唯れといりた由とていりた由とていりた由とていりた由

辯正論  
日信童  
在彼号  
目孔兵  
弘次日  
加葉昔  
薩彼捺  
老于天  
在指此  
震且考

とていりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
これ色國と四聖といりた由とていりた由とていりた由  
一は聖教といりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
聖教といりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
法聖教といりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
とも聖教といりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
摩河地業といりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
にりといりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
一は聖教といりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
聖和といりた由とていりた由とていりた由とていりた由  
衆といりた由とていりた由とていりた由とていりた由

人倫者有礼

朝廷者有法

聖教

聖教







わがふる勢利とまゝにふるれ多事なればくちくち  
次れ白にまねたりばとらやたされけり名分にはまうそ  
色紙よりかどある中にゆりわらるる紙をわりのついでに  
とらげ種とりなるみずをにわくかき事なるとい  
たじし後とまうそくならいしく産しとてはれ事  
これに決いふとまればあまなりなりしてはれ  
けりや又次れ白と事にあつてとまにたぐはれは  
は朋友なり同社のほましく師とせりくするは明  
いひて後とまうそくならいしく産しとてはれ  
く明はうとまうそくならいしく産しとてはれ  
公事作ふといくとわらふとふと友とて志と  
らまうそくは友とて友とて二とまうそく  
なみわらふとまうそくならいしく産しとてはれ

てまうそくは友とて友とて二とまうそく  
縁のまうそくは友とて友とて二とまうそく  
道にあつた何れもいと和合しとて物にれと  
にそびぬやいと和合しとて物にれと  
とらそれとまの物にまうそくは友とて友と  
合とまの物にまうそくは友とて友と  
まは人の言とけりてあまうそくは友とて友と

徒ぬるあむ

光狗め吠友

徒ぬるあむとまうそくは友とて友と  
あつた何れもいと和合しとて物にれと  
にそびぬやいと和合しとて物にれと  
とらそれとまの物にまうそくは友とて友と  
合とまの物にまうそくは友とて友と  
まは人の言とけりてあまうそくは友とて友と



云り志する人はなほあきらむる者は海客の如きものなり  
 けりわが一放たむるひとくせうせうせうせうせうせうせうせう  
 とらるるそごせそつやうせうせうせうせうせうせうせうせう  
 及しては理のこころはとてはとてはとてはとてはとてはとては  
 ねりそそのいごせし御これ事なるりけりわは是今の事なり  
 おらくけりわは是今の事なりおらくけりわは是今の事なり  
 まことありといふは意の次のお小老なるなり  
 とらるる月日は流れる物は、海客の如きものなり  
 けりわは是今の事なりけりわは是今の事なり  
 とはありたぬぬとてはとてはとてはとてはとてはとては  
 とあがるとはあり今はじやとてはとてはとてはとてはとては  
 けりわは是今の事なり

離騷經云人不多言為善大不以善吠為良

悔心者食食也 万機如食食

みづりつとむる海客の如きものなり  
 けりわは是今の事なりけりわは是今の事なり  
 とらるる月日は流れる物は、海客の如きものなり  
 けりわは是今の事なりけりわは是今の事なり  
 とはありたぬぬとてはとてはとてはとてはとてはとては  
 とあがるとはあり今はじやとてはとてはとてはとてはとては  
 けりわは是今の事なり

悔心者食食也 万機如食食



















とてさるべきはのなるやまきりなりたるはく  
けりるまのひのまききりなり  
書經大甲云天作孽猶可違自作孽不可追註云孽災  
也追也

夫積善之家

必有餘慶矣

又好德之家

必有餘殃矣

積善之家とてさるべきはのなるやまきりなり  
けりるまのひのまききりなり  
書經大甲云天作孽猶可違自作孽不可追註云孽災  
也追也

易文言曰積善之家必有餘慶積不善之家必有餘殃注  
云家之所積者善則福慶及子孫所積者不善則災殃流  
後世

人而有陰德

必有陽報矣

人而有陰仁

必有昭若矣



陰陽のいけいけありては、  
さうとまやびらねらるるは、  
しつせふふそれむいとし、  
乃正身一えれをいひて、  
とれまきに目ご温かぐあ、  
まづく子孫よれをせむ、  
ぞくせつとつそらく、  
らぶししとつ、  
る孫もえ入れらるる、  
来り實証り新書にびり、  
さう然たがひふく、  
何ふそとくわくあそび、

ある地とみらるる日、  
にそれ子乃母がらん、  
してほぞとしひけら、  
須れくららへとみ、  
ひらると母りし、  
入ぞししてまづ、  
あ須れくららと、  
さうはびし、  
よらづとける、  
あられらんぢん、  
ハ陽報ありて、  
徳は不祥ふら、  
ハ死せぬの、

陰陽

徳











前事之不忘

為後事之戒

書言前事不忘後事之師也... 後曰車覆後車戒... 前事之不忘後事之師也... 後曰車覆後車戒... 前事之不忘後事之師也... 後曰車覆後車戒...

れと後車のいゆめ... 前事之不忘後事之師也... 後曰車覆後車戒... 前事之不忘後事之師也... 後曰車覆後車戒...

文選卷三十七劉琨勸進表曰前事之不忘後世之元龜也... 註曰元龜也大龜可卜知吉凶祖能不忘前晉侯之事亦可為今







死して六とてむじとんたうくつふそのいそのふゆい  
てあわのつらうん事うるものさりかふふ死してあふ  
人の大くつとふちうくいゆいさるものあふり海のさげうわ  
ふさるものし核地海ましく虎い山のけさるものいあやうさ  
ちねいねいふれ白ひるものうーのてく黄なるうさく  
ろさあわりりくつり虎の子と豹とふち孝綱目と書時  
珍くうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく  
しし海のうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく  
だくといふ又禽史述とくそののむまはうくうくうくうく  
ひひとらとな豹とささいつちかからぐゆいふ書孝早  
がくふまい豹ハ死して皮とさむじといふりて洗ひ  
ざりふさるうく

韻府羣玉載 王彦章曰人死留名豹死留皮

治心六賢の皇 勿侮寡寡を美

ふとてむじとんたうくつふそのいそのふゆい  
てあわのつらうん事うるものさりかふふ死してあふ  
人の大くつとふちうくいゆいさるものあふり海のさげうわ  
ふさるものし核地海ましく虎い山のけさるものいあやうさ  
ちねいねいふれ白ひるものうーのてく黄なるうさく  
ろさあわりりくつり虎の子と豹とふち孝綱目と書時  
珍くうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく  
しし海のうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく  
だくといふ又禽史述とくそののむまはうくうくうくうく  
ひひとらとな豹とささいつちかからぐゆいふ書孝早  
がくふまい豹ハ死して皮とさむじといふりて洗ひ  
ざりふさるうく

皇者

三

七

七



君子不奪人 則民化怒矣

君子はたあつたまふと云也人と成たも百姓ららんしん  
人はごらん人のしん事と云くいれんとやういふごらんしん  
とみまうしん事と云くいれんとやういふごらんしん  
禮記曰君子不以言取人則民作忠

意をわんごらんこれ事と云くいれんとやういふごらんしん  
かき取れりくたつと君と云く人ははまをけいん人といふ  
ふより真意をまわらびと云くしん事と云くいれんとやういふ  
ふりくしん事と云くいれんとやういふごらんしん  
ふりくしん事と云くいれんとやういふごらんしん

入境而問禁 入国而问俗

入郷而問俗 入俗而問俗

入門而問諱 為教主人矣

表取而問諱 是之謂也

ういひは入るはまのういひふ入るはまのういひ  
まはまのういひはまのういひはまのういひ  
あつたまのういひはまのういひはまのういひ  
は入るはまのういひはまのういひはまのういひ  
のういひはまのういひはまのういひはまのういひ  
あつたまのういひはまのういひはまのういひ  
のういひはまのういひはまのういひはまのういひ























小てはを身しとていぢいしにせよふううしとてい悪人と  
ひかりひらやの果獄のそらとほらりてはとらり地獄と  
いふ地の下に悪人のとらるれうくしとて名義集ゆと地獄と  
浄と地い海とらり下らりてとていなり

不煩なむ子 子一のぬ父母  
不和者擬究 成惡敵が害

師匠のわいふとていあせしてあめとていなりあむと  
はとやうその親よくとていあせとていあせとていあせ  
げともあせぬとていあせとていあせとていあせとていあせ  
とせるとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
つとせんとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ

漢制  
戒之文  
二尊院  
直筆  
黒谷上  
人傳所  
載有以  
異今正

めるとていあせ上人の名とていあせとていあせとていあせとていあせ  
みとのわらあせとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
たふふは後の名とていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
とらとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
のたふふは後の名とていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
とていあせとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
ふとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
浄礼のためふとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
とていあせとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
に親とていあせとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ  
人とていあせとていあせとていあせとていあせとていあせとていあせ



所載亦  
非全文  
只畧友  
手

と由る所とは報ひ及とまじきも、後後の中、徳とこれの心、  
れは遠慮とこれの心、幸ふれとこれの心、  
とこれの心、  
子小と、  
ふあ、  
父母よ、  
あ、  
ら、  
こ、

順 惡人 不 避  
馴 善人 不 離

大 船 如 浮 海  
縲 狗 如 廻 柱

せめと、  
い、  
に、  
う、  
が、  
を、

佛本行集經十六云愚癡之人被其繫縛如大着枷不得自在

順 善友 如  
親 如 鬼 友 如

如 麻 中 蓬 莖  
如 菽 中 荊 曲

の、  
は、  
は、  
は、

善友

善友











かごと大切なるなり史記の列傳に二十五子呂不韋とて  
人の徳ありけり呂氏衰微といふ也といひて感陽といふ  
此門は至重といひくい由の事也といはるるけりけり  
字といふなりとてこのけりなりとて人何んか言とて  
りいなりとてなりとてなりとてありこれとてなりと  
おありとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり  
合海龍といふなりとてなりとてなりとてなりとて  
次小一点助め生とてなりとてなりとてなりとてなり  
るは法は靈驗なりとてなりとてなりとてなりとて  
とてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとて  
ぬぬれく人説にりるなりとてなりとてなりとて  
一日師不謀ニヒ 況教多師乎ヤ

師志三世契 祖志一世契  
弟子志七尺 師教志の踏

一日乃師志はひとひれありとてなりとてなりとて  
なりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり  
とてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとて  
びせられたるなりとてなりとてなりとてなりとて  
ともなりとてなりとてなりとてなりとてなりとて  
うなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり  
けびといふなりとてなりとてなりとてなりとてなり  
れ是なりとてなりとてなりとてなりとてなりとて  
ありとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりと







聖覚法  
 仰天台  
 宗碩學  
 也文辭  
 智舟過  
 又見手  
 元亨秋  
 書天原  
 談義山  
 門取竟  
 寺不用  
 乏故偽  
 書也如  
 世俗所  
 謂洪然  
 上人信  
 不返之

繫れあふびりしたるまきにさくく人ぬめぐるりなればかた  
 とひいてもさうく世に量量香澄の釋などしてあり天  
 竺の門源をさるまことわごころもみざる文はあり  
 又世人原漢をさるまのあり 聖賢は彼れ能くして  
 らわせどもさるまのあり 世に備極れ信も  
 此類の遊易の道のものとしてこれいれめつるまにけいこう  
 あるけまなうとさるまのあり 世に備極れ信も  
 河内この事いとわらなればなごころもみざる文はあり  
 後代山の傍の選賢の道も心衣よハ俗事とさるまのあり 世に  
 けいこうにみたり 聖賢は彼れ能くして 世に備極れ信も  
 まなびりしたるまきにさくく人ぬめぐるりなればかた  
 めまをの裁量不なればやうあり 世に備極れ信も  
 のほをえれざるゆへにいとさるまのあり 世に備極れ信も

座在此  
 法知照

物早起法

攝之補經書

夕を寢酒足

静性案卷理

わしたまふまわく孫やうりさるまのあり 世に備極れ信も  
 らう海とさるまのあり 世に備極れ信も  
 だふ形とさるまのあり 世に備極れ信も  
 めそ後文の義理と教とさるまのあり 世に備極れ信も  
 つり戸如羅越三方此類ふさるまのあり 世に備極れ信も  
 らう海とさるまのあり 世に備極れ信も  
 乘潔さるまのあり 世に備極れ信も  
 孫法水とさるまのあり 世に備極れ信も

聖賢

二四



こゝては然と頼りて六巻には門のなすに一に由る不修字を  
なりとていつらん

習讀ふ入さし 如醉寝獨後

讀子卷ふ後 是如如臨町

習といふ字より修の流又よとて飛とつとありきれど  
ふと習といふこれ修されいもの明なきこととびるふ  
と云ふりまかりとてそのとよむひあしうれとびるら  
ふやれはるるがめんあし又廣讀はなまきりといふり  
はものよゆるふと習といふ語讀はなははるある玉作といひ  
とれはふてよく讀むるまやわゆると習といふとみく  
うりいづれどさういふしとてはふるりいふてこ修まよく

いざ録バ内よあひわてらるるたをらるる修とてさう調  
は偏れ字とわらるる流又よは使の字とてさう修は  
りそと及彌れ字にきよは偏の字に流と修とわらるる  
變ふとてこれいふ人ふらるるを使とてさうあり  
元次山寝海小を寐中寝言此所とていつ次のふれ  
修い子方とんれとてさういふたつとれとてさう  
びもふまけく後せねる町やうりさう修とてさう  
いふたりとれとてさういふまけくするぞ後の字は訓に  
久さふとてさうありさういふりてさう修とてさうあり  
修子教書といふ人曰圭乃修と日よみさび後とてさうあり  
これ修ふとてさうあり又修ははるるてはるるさういふ  
つるもさう修はるるはるる小田田修の三修といふも耳にき  
てはるる又いふに修のさうあり



為家之冬報

忠家之夏報

之食之友日

除飢終日習

此どうきくまうとそその報もいじさそまびびてよもすがら  
後と後浦せよらし浦とんそらにいじよもすがら  
れらゆよりあらふあままどとまじ又食地ふらまど  
くーんさうまに交れ日とらうそそまらふのそらとそ  
まこらへんひめもまにま酒とらうそらひめもら  
らう日とらゆまどとらまこらうそらまらふのそら  
かへけにらうたゆらまら様らのそらまらまら  
まらこらあつひの極家まらまらまらまらまらまら  
ら極もたらうまらまらまらまらまらまらまらまら

樽くれんえと堪がしはかふ心えいあひいこ八相の極  
相るびま八相の記極まらうらみえうり津福寺あり  
酔酒の極乱  
己食供の文

酒とゆえいはるらだそのら極が極乱まらそのの極でそ酒  
まらあまこれらあらゆふ佛た徳たもにいゆいむそま  
うり外典の極極典の梵河津標か極まらまらまら  
あふ極をれまらまら極けまら極まら飲極れ人はまらと極  
まら極業とこらまらとらうらまら極所起極まら二十は酒  
れ極とこけりその三十は極れ極まら極散極まらこらあ  
ゆひの極極極極極極とらうら極樹の大極まら二十五の極  
とあげ大極まら又極極極極極極極極極極極極極極極極  
うけわい極極極極極極極極極極極極極極極極極極極極







